千字讀義德圓集 乙

特
へ遺13
1857
分止

但州
中屋甚左衛門
湯嶋

へ13
1857
55

但俱

下ゝ浅議聴聞集巻之六

但州
中屋甚左衛門
湯嶋

京都帝国大学
昭和図書

東京帝国大学
昭和図書

八重子聯歌募選兼蓬莱屋富士右馬

江の島弁才天より宝を授し事

多摩川さらし布さくにぬれ

人のひいきやうぐ。ゆれて。八重子歌

禁ゝ。人竟光んで天ゝ。光ゝ

外竹軒 撰

事し。かなはぬ所乃光卿として。あるも
よし雑賀町のうち。番屋に。番米屋より徳助
頼まるゝかたらひて。よい何事と
立さうぞと。八重子と案ずるに。夜
前は隠居。勝義柏が出果をされと。安ち
驚く徳助夫婦。ちてくるまい急ぎ。
代同じ出役宣乃あるうしが。何はさうり

をなるうに。殘り多さ事やし。夫婦が
かげさ。家内乃さまこが。先く光卿方より役
でと進ぜし。ふくにして神ぬ先山乃
人人成れ。向い町へと使をやもあうこと
と。義一すしたうすもこと。遣くたあれまる
八。兄弟八人。姉八人。皆一同よ祖とそ誘へ先
頃大勝連で来りが。代世乃出婚結と成

しと兄弟法くく。旅支度。して用意して立ち。ものもあへず。仕上下に。淺黄。嘉。八人まくを立流す。さて。異腹なる持て来たるば。徳利。さかなに。先八代目。いざ。ちと。前。取にと。受ばよあたらへと。八代目。ものもいはず。そちをば。のまり。親が。酒を。出て。はかどものめいろく。

はしぬ。八月。初。又どの。云れ。八。迎。して町人乃。葬送。この。大そうに。奢る。これもの死れば。大さん。搗ようさ。ばよい。思うのに。くだらぬやうな。葬送。して。長ものと。ぐれ。いい。立れ。先。もかく。ふと。親乃。れ。と。ぎ。は。不孝乃。罪。又。追善。ものもの。ぬ。人。そ。度の。仏。を。果。て。済よ

ある。きう〳〵たる人ふと申すゞ。葬送り
古礼なるといへ。ぞくに志ほくとぶりふと悲
にたゞみあるこそ。真実乃葬送ゆうんと
聞けバ。何をも。商世風の葬送よすゞ〳〵。
実由〳〵女子ども乃供を曳通。きよ上下や小袖
ハ出乃糠袋に。くれて参りやもと。こう〳〵
編笠を。用意〳〵さげます。と〳〵葬送ゞ

日中ゆうきを乃れてきあるゆ〳〵見を正れ
ぬ見兄弟庶をこ庶ゆ〳〵れもい〳〵を皆く
充なるゆゞ去実乃葬送。れすゞ。
想領よきゞ月て一回〳〵。中ふと二男丸爰
花ゞ言成けて。実でも寺まで乃きを
庶〳〵ハ。世話でも。焼候乃。一ツづゝハ。ぜんぜ
と〳〵〳〵。うるゝ三男丸三郎兵衛。れをゞ

髪はあまりむりゐ人、結び直せとゝ思ひ
さゝれて系釜にはせぬ程ゝ思ひ切り結ぶ
と帝しの中をも撞てぬ家がまそだち。
大きゝ紙水髪を結び直して是で書世
乃帝風ゝとゝすもとゝ四だん月とて四帝
以帝。斉ひすゝとゝ柄と鶴もとゝげちゝゝ
供脚指紙ゝとゝ。ゝだん月乃八帝七ハ。

いりふと古ひ上下紙ゝり云ゝして出ゝ
とゝ出ゝとゝだ。六どんめの六治帝が八細紙と
勘略して紙にくゝさし寛永通寶柄も
結ひ細ユゝれとゝ人ゝぐはひゝて。七だん月乃
七八帝ハ。髪をとゝげゝ面ゝ風
結と偽せゝだ。八番月乃乙治帝ハ。古ゝ小袖ゝ
こまりゝて急ゝ面沢町へもゝらせて。ゝ

とゝけゞ。和文乃ゆるれバ。賣る人。婦
せうくるあいさつ。れ。新〻物ゝ恵紙
高く賣りてゞるゝ。さあく。扨ゝ
もゝ。立さゝぐ。向ゝ。表もあけて。あ
ゆうくれ。鳥ゝ。立いでゝ。ゆくバ。ほどなく。
ひさうなる。八重ゝ乃。庵へ。美女。出袋に。月
ゝ。ゝ。ゝ。

がりぐめて裏乃佐なきうぐゐゐぐ。此
度ハ一向裏の佐ゝ乃やます。別して
きゐ柘ゝ藤義ゝハ清熱ゝ乃事に清
度ハ濁バか柘ゝあぐるとぷりどにごり酒
とれど佐乃俗ハ清ゝ酒ゝ風。あうぐさを更
ゝ清なのぐゝこの清なるのごりまとれば苦
まで五ハ五ゝり柘笠。なさん下りをうぐ。

ゝ乃ぐけなく。なまとるゝ。返事のて
うゝきうぐゝや別派にし成しうべ。村乃
嬖ゝ嗅。紅乃さめゝぐゝ藤義ゝ柘乃清吊
江ゝうゝ見ゝを。大勝ゝ世ゝ。定めて頭な
吊ゐでおうゝ見物すゝバ。寡ゝ遠て
直ひうゝ拘一挺早布でうゝげ。麻上下ゝ
ゝ若ハ人者乃髮ゝさて編笠うぐ

びをごくと。盆徳山長楽寺へ這入る。墓を
いでまゐ。遠方の所にて。礼堂して度る
つけバ。和尚おられ。引導経文事厳し。サア
清焼香と。坊主げ知せよ結ひ自を
居らして。和尚へ尻ひ〻ぬを様しば
志ほくと。地頭へ焼香する。あまり用
ぬらして。真にたまりぬてご詠歌と

仕ん〻ぐ仕ん〻ぐ。坊主とも。追ひ
出し乃紙ん〻くと。顔へ塵紙ぬけ
てどやく〻ん〻中ふと村乃者ども大勢
にさてとけられ帰ひ。親父げ呑ひと
ゆ。江戸者らくとるあんまりの奴ら
じやと。悪口い〻ぞ。合ひ呑ひと
格別なりなど形ゆりふと様しば。目を注

ちゝ　ふりふとぶつまひなを上げみてる氣色
にて　ものこゝろあるうゝふれるものといふ。江戸
京乃中うつぶされぞ此藪選ハ下る読議と
つ　読ずよあつ通ものこれを守りて。去実
の吊ひどやこゝ云ぬ　もれれば。假名おを
うゝくとえぬうゝ　しうがくなる事
しやひうとのまばイヤあまり俗ものて

結白用にこれとこゝるものもあり。とゝ
く此をつもち　誘をるゞ能うゝ物乃今ら
ぬゞ　一と。なもひくゝ　評判して。帰る
中ふと江戸うゝ来ゝる。蓮葉屋面老人と
ゝ。名ぢけとハ相違しと言し。異て
者で。何やゝ。仕偽もて。今ハ商賣ものの
風ゝい者。ゝの癖。物ゝゝる男。まゞ然

事は仕出すとかくとう氣がすまぬ門で
見り。連は撫んば。多摩川へうらん新の
ら百で氣晴しせんと。ぬりとく下りて
紫あび川の月をうとうたくと。歳新の
色ぶさし紙入て。卵の濁みづく事は成
らぬもア、仕し矢はいつ面へ出て。義奥
の社はぬうぶらぶ。ぶれりを忘ゆくなど

よ。そや川晴の川の月つ場へ見さぬ。それハ
かるれと所と。安てあれを六郷江戸は方よ
向川てあるがいやくとそもの事に。江の渡
乃雑戈天へ切て。身は福徳弘。いのぐやし
りてを。路金ぶありてをあけ迄で。殺け
糸をうへ。げ川こう糸川てぶりに墨
う。千里は所と西うれぬ事乃あるべさと。

いつと英皆服と色うなり。英貧でいざ
や御ゝと。椹義至乃簀のそもちに一枚
を拾さす。英中より立出て。ぐ一点よに
乃酒の海湯へ英あれど私もの世うと
なして汐を点とて。肌よなり。ぐ点よく
と。叡至へあげて。身縮ひ仕ても。すぐ疲
をあけぐ。遠くぐ。をこれより南敬ひ

事、紙やあぐすと。拾ようして。ぐさま
ぐさ。私を数多祈りぐ。福神様といのり
ぬまれど。いまぐ出たまけをぐう面せた
のんざ仕ます。何卒金銀と事願ませ
ぬやうと。神様ひやあげ面する。辯才天女
念願成就と。やりてみもバ。をとよ六七人乃
ぐ。ぐ。絶ーひ。ぐ出て。ヤイる鹿めと

ゆすびけくるを。れいのもぐやうに金弧を。
ほうらけみ。そうへ商賣もせぬ者を
ゆゞ。福乃たゝのと。天より降るものと
思ふ。ぬんく無乃にまつ成もきつぬ者
に。宝なゞあゝる事ハ。ゆゝ。福神を
乃すりあひ来まつ流へ。ね読し
てゝろほどに。ゆゞく走り結けて居ると

すゞくハ知まゆゞ。それをけゞめて。雑炊天
乃神ことゞであゝと結けて。黒塗の箱ゞ
一ツ出さを。取あゞまば。コリヤ富貴太夫。ゆんゞ
よあゝ成けゞくるゝゞ。きゆけまで。折角
秋中よゝ〳〵。糸引しゆへ。六人乃底ゞゝ
簡でけゞくるけまゞと。今まけゝゝる事
ゞりけて。あゆるゆて。いけゞやも

我中よ。だゆうるり古更めゞ来れど。宝
乃ゆハ密さ太さに河つて攻しさ。元らハ
世とのためよるゝ蛍川。ゆんぢもぞゝもの
みれど。れ乃もゞゞ卵一ツゆて仕ま面めゝ
さとれゆりぬゝ。ちゆげてゆ。かゆゝす
義れて明くまゞ。酒へ攻ゝしみて
糸せゞゆれうゝ事ゆれと。まゝ奥

如く言すまゞ。さてありゞゝひ事ゆ
と。伴乃箱紙れ行いあゝさ。東とちゝめハ
ゝ出して。京ぐゞほどよ。なんゆく歌屋よ
元くやいなや。酒市一人紙所ゆ行け。れ
湯と汲元。紙紙おせ。元をめて。歌ゞまゝ
次ゆ。ちもゞと元れゞ。れとて水紙
あゞて。ゆと清め酒市ふと入せず。歌猫

波箱とりかへ。ほどの重さ。うき
しうよ。あけてこへまとど。十雪駄を挺
草鞋一足ぬ。ざれ打ちまう。捻りて入
れど。ぱらぱら十雪駄孫乃草鞋。あまり
ぬのされてうりむさ。ぐ。ぐくあけて
起さあげり。打いてぐひてぱりてもあり紙
これ教りの宝物。ぐくぐくふて。抜ぎ出せ

ぱちぐへちぐひのふやうよ。仕ましけ二ふて
ぐされ。ぱらぱらあ。ぐ。ぐ。ぐ

殺ハ癖ていハ結ぶれぬ。ちゞめて商の惜
ゐ。分限なる者多くハ実を業
乃不老不死成。源らせたまひ八百八町
ゆきせぬ御代にて。光でゝけを

下毛談義聽聞集巻之五終　大尾

跋

下毛談義聽聞集巻之五

世之人頗釋尊乃説
法年ひと節
の説を聞て年
者の上にも化心の
浮世をもふ事も
なりしと迷ひの結と

愚意のおもふを口にまかせ上手下手義我法則場中に出るまゝ而已

寶暦四年甲戌孟春穀旦

上潮日

東武 猶十郎 作軒著

但州湯嶋 中屋喜兵衛門

書肆

日本橋通壹町目

松栢堂板

彫工 田代一瓢